

体育授業の悩み事に関する調査研究 (その2) —悩み事の解決方法を中心として—

加登本 仁*・松田泰定・木原成一郎・岩田昌太郎
徳永隆治**・林 俊雄***・村井 潤*・嘉数健悟*
(2010年12月3日受理)

A study on the difficulties of teaching in physical education (Part II): Focusing on the way to solve the difficulties

Hitoshi KADOMOTO, Yasusada MATSUDA, Seiichiro KIHARA, Shotaro IWATA
Ryuji TOKUNAGA, Toshio HAYASHI, Jun MURAI and Kengo KAKAZU

Abstract. The purpose of this paper is to grasp the actual situation that what kinds of ways the elementary school teachers take to solve difficulties in teaching physical education class, and what kinds of ways they demand for the solution of the difficulties, and then to examine effective supports for the solution of the difficulties.

We performed inventory survey for 348 primary school teachers. The investigation objects were divided into four groups according to two attributes which were consisted of “the curriculum coordinator of physical education” and “those who study about physical education”. As a result, it was suggested these two following points.

1. It is considered that the organization of the in-service training about physical education in their school is an effective way to solve the difficulties of teaching physical education class for various of teachers, in which the professional knowledge is communicated by the teacher who is positively participating in physical education and shared with all staff in their school.
2. It is considered that it is necessary to make climate that teachers are easy to participate in the in-service training and meeting for study out of a school and get financial support from local educational authorities.

KeyWord. Physical education class, In-service teacher, Difficulty, Primary school teacher

1 はじめに

筆者ら(2010)は第一報で、小学校教師が体育授業を行う上でどのような事項に悩みを感じているかについて分析を行った。その結果、授業での適切な学習規律の維持や子どもも相互の協力的な関係づくり、また、安全を確保したり意欲を喚起しながら指導することなどに関する悩みは相対的に低い傾向にあった。しかしながら、配慮を要する子どものニーズに応えることや、一人ひとりの子どもの学びを把握するといった個別指導に関する課題とともに、自分が模範を示せない種目の指導や子どもに合わせた教材づくりなど、いわば体育授業における「内容的条件」(高橋, 1992)に関する課題については悩みが高い傾向がみられた。また、教職経験の違いによって分析すると、体育

指導に積極的に関与している教師と比べて、そうでない教師は全般的に悩み事の認知が高い結果を示していた。これらのことから、体育指導に積極的に関与する立場にない教師に対して、悩みを低減する方途を検討する必要があることが指摘された。

文部科学省ホームページ(2010)によれば、教員研修のうち10年経験者研修は、「個々の教員の能力、適性等に応じた研修を実施することにより、教科指導、生徒指導等、指導力の向上や得意分野づくりを促すこと」をねらいとして行われている。つまり、小学校教師は全教科を担当しながら、採用後10年を目途に、教科指導や生徒指導といった得意分野をもつことが奨励されている。しかし、そこで体育科を得意分野として選択する教師は決

*広島大学大学院教育学研究科博士課程後期, **安田女子大学, ***梅光学院大学

して多くはないだろう。それでは、体育を得意としない多くの教師は、悩みをどのように解決しながら体育指導の力量を高めていくのであろうか。

木下(2008)は、体育教師の力量を高める上で以下の10点が必要だと述べている。それらは、「①官民を問わない研究会・研修会への参加頻度と協議会での発言の頻度を高める②自己の公開授業の頻度を高める③行った授業を再現する④運動構造や教材等に関する読書量、情報量を増やす⑤小・中・高を見通した目標、内容についての理解を深める⑥教育学的視野で体育授業を考える⑦自己の考えを文章にまとめる⑧子どもは『よく生きようとする存在である』と自覚する⑨カリキュラムメーカーとしての自覚を持ち、作成する⑩実技能力の維持・向上」である。この指摘によれば、教師は学校内外の研修の場において他の教師とともに積極的に学ぶことや、自己の授業を対象化し振り返ること、さらには授業以外にも運動構造や教材等に関する知識を増やし、実技能力の向上に努めるといった意識を持つ必要があると考えられる。たしかに、これらの意識を持って積極的に授業改善に取り組んでいる教師は、体育授業に関する力量を高めるに違いない。しかしながら、筆者らが第一報で報告したように、体育指導に積極的に関与する立場にない教師は、授業改善の意識の高低にかかわらず、悩み事の認知が高い傾向を示していた。そこから推察されることは、小学校教師は体育授業の改善ばかりに意識を向けていられない現状があるのではないだろうか。

朝永(2007)によれば、小学校教員の90.7%が「教材準備の時間が十分にとれない」と回答しており、また、87.5%が「作成しなければならない事務書類が多い」ことに悩みを感じている。すなわち、通常9つある教科の指導や教科外活動の指導、校務分掌や事務処理を抱えている教師たちは、理想的な力量形成の在り方と多忙な現状とで葛藤を抱えていると考えられる。そうであるならば、小学校教師がどのような現状にあり、どのような解決方法を望んでいるのかを把握することで、より実現可能な力量形成の方法を検討する必要があると考えられる。

以上のことから本研究は、小学校教師が体育授業を行っていく上での悩み事を低減するために、これまでどのような解決方法をとってきている

か、また悩み事の解決に向けてどのような解決方法を求めているのかの実態を把握し、有効な支援のあり方を検討することを目的とした。

II 研究の方法

1. 調査対象及び調査時期、調査方法

第一報に記載したように、質問紙調査法を用い、2009年6月～8月に行われた教員免許更新制講習、体育実技講習及び小学校体育に関する認定講習を受講した受講生を対象とした。その際、調査の主旨を説明し、同意が得られた受講生に対して調査用紙を配布し、一斉に調査を実施しその場で回収した。対象者数は350名であったが、このうち体育を担当していないため回答項目が極端に不足している2名を除く348名を分析の対象にした。

2. 調査内容と分析の視点

本報にかかわる調査内容は、悩み事に対する解決方法の現状、及び望む解決方法についてそれぞれ「同僚の先生に相談する」等についての全12項目を設定し、現状に関しては「1. まったくそうしていない」から「よくそうしている」までの、望みに関しては「1. まったくそうしたいとは思わない」から「5. とてもそうしたい」までの5件法で回答を求めた。

これらの事項について、対象者全体の実態を把握するとともに、第一報で体育指導に関する悩み事に差異がみられた教職経験をもとに解決方法の現状や望みの実態を把握することで有効な支援のあり方を検討することにした。

III 結果と考察

1. 体育指導上の悩み事の解決方法の現状

(1)対象者全体の傾向

図1は、体育指導を行っていく上での解決方法の現状について、「そうしている」と「よくそうしている」を合わせた割合を示したものである。「校内の同僚の先生に相談する(同僚)」が70.7%と最も高い割合を示しており、次いで「専門書・雑誌を読んで勉強する(文献)」(49.5%)、「インターネットのホームページを利用する(HP)」(46.9%)の順であった。これらの解決方法と比べて、他の方法はかなり低い値を示しており、「教育委員会主催の研修会・講習会に参加する(教

委) (28.3%), 「他校の先生に相談する (他校)」 (18.9%), 「地区の研究会に参加する (地区)」 (18.8%), 「研究指定校の研究会に参加する (指定校)」 (15.8%), 「教員養成系大学で行われる各種の講習会に参加する (大学)」 (12.2%) と続いていた。これら以外の解決方法では, 「教員養成系大学の附属が行う公開研究会や研修会に参加する (附属)」 (9.3%), 「自主的な研究サークルに参加する (自主)」 (7.0%), 「民間の研究団体が行う研究会に参加する (民間)」 (5.9%), 「教職大学院や教育学研究科の大学院で専修免許を取得する (大学院)」 (2.1%) が10%以下の低い割合を示していた。

この結果から, 小学校教師は体育指導に関する悩み事の解決方法として, 校内の同僚の教師や文献, HPを主な情報源としている傾向が読み取れる。木下 (2008) が指摘している「官民を問わない研究会・研修会への参加」のように, 勤務校を離れるような解決手段は, あまり行われていない現状にあると考えられる。

(2)群別分析結果

図2は, 解決方法の現状について「そうしている」と「よくそうしている」を合わせた割合を群別に示した結果である。I群 (体育主任の経験がありかつ研究教科が体育) をみると, 「文献」 (58.9%), 「同僚」 (57.1%), 「教委」 (53.6%), 「HP」 (51.8%) で半数以上が解決方法としてあげており,

また他の群と比較して「地区」 (43.6%), 「指定校」 (37.5%), 「他校」 (33.9%) などをあげている割合や, 「自主」 (25.0%) や「附属」 (23.2%) などを解決方法にあげている割合が高い傾向がみられる。また, I群と同様の傾向がIII群 (体育主任の経験はないが研究教科は体育) においてもみられる。III群は, 「同僚」 (92.3%) が極めて高い割合を示しているが, その他の解決方法は「附属」 (11.5%) 以外の解決方法の現状においてI群と類似した傾向を示している。I群とIII群に共通するのは, 体育を研究教科として担っている教師であった。そこから, 体育を研究教科として担っている教師は, 体育に関する力量形成に向けて多様な場や機会を有していると考えられる。一方, II群 (体育主任の経験はあるが研究教科は体育以外) は, I・III群と比べて解決方法としてあげられている各事項に対する割合が全般的に低く, I・III群と比べて「教委」 (26.8%) や「地区」 (14.3%), 「指定校」 (16.1%) の割合が低い結果を示している。そこから, 体育主任を経験している教師は, 積極的に体育指導に関わる立場と考えられるものの, 悩み事の解決の場として学校外の研修や研究会に多く参加している現状にはないと考えられる。また, IV群 (体育主任の経験及び体育主任の経験がない) は, 「同僚」 (77.2%), 「文献」 (46.1%), 「HP」 (43.4%) 以外の解決方法をあげている割合が低く, 全般的に他の群と比べて最も

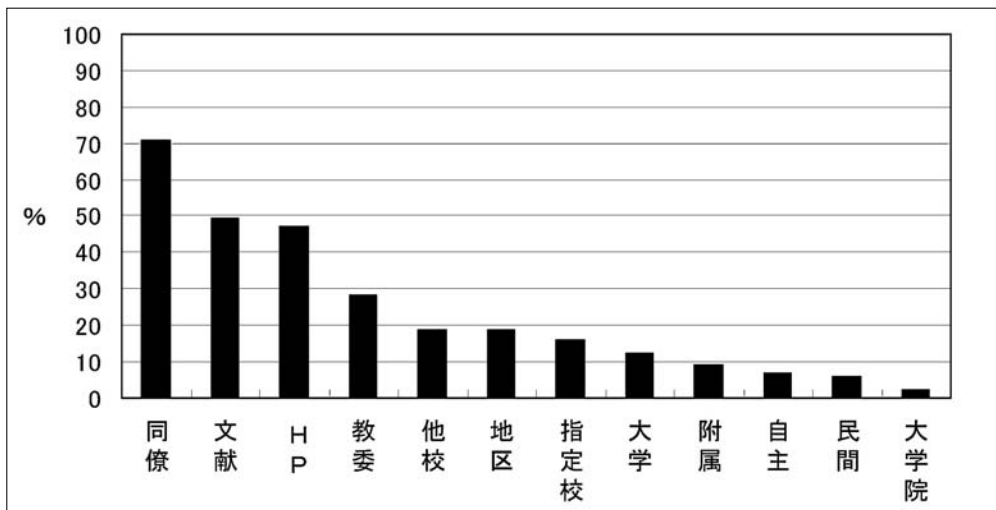


図1 悩み事の解決方法の現状

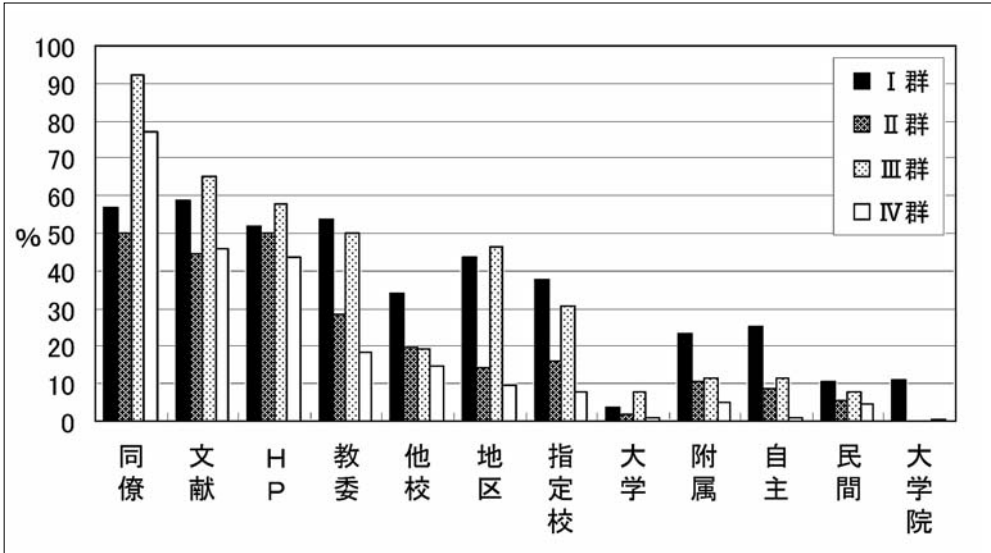


図2 群別による悩み事の解決方法の現状

低い割合を示している。

以上の結果から、悩み事の解決方法の現状には体育指導に積極的に関与するような経験の差によって異なる傾向を示していると考えられた。その中でも、体育を研究教科として受け持つ教師は、学校外の研修や研究会への参加機会が多いものの、そうでない教師は「同僚」や「文献」、「HP」といった学校内での情報交換や自己研鑽に頼らざるを得ない現状がうかがえた。

2. 体育指導上の悩み事の解決方法に対する望み

(1)対象者全体の傾向

図3は、体育授業を行う上での悩み事に対して、どのような解決方法を望んでいるかを、前項の現状と合わせて示したものである。

望みに関して、「そうしたい」「とてもそうしたい」と回答した人数の割合は、現状の解決方法の割合よりもすべて高い結果を示している。解決方法の望みでは、「校内の同僚の先生に相談する

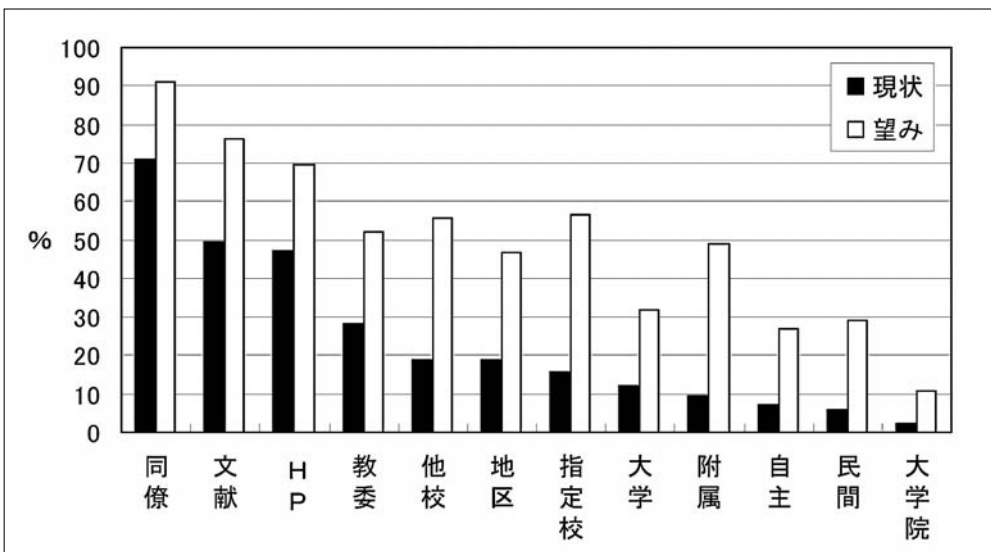


図3 悩み事の解決方法の現状と望み

（同僚）」（90.9%）が最も高く、次いで「専門書・雑誌を読んで勉強する（文献）」（76.2%）、「インターネットのホームページを利用する（HP）」（69.3%）が高い結果であった。現状においてもこの3項目は高い傾向にあり、「同僚」、「文献」、「HP」は体育指導に関する悩み事の解決に有効な手段であると考えられる。しかし、望みには現状にはない傾向が読み取れる。それは、先の3項目に次いで「研究指定校の研究会に参加する（指定校）」（56.4%）、「他校の先生に相談する（他校）」（55.7%）、「教育委員会主催の研修会・講習会に参加する（教委）」（52.1%）、「教員養成大学の附属が行う公開研究会や研修会に参加する（附属）」（48.7%）「地区の研究会に参加する（地区）」（46.6%）といった項目が、現状では低い値を示していたにもかかわらず、望みでは高い値を示していることである。そこから、小学校教師は、望みとしては学校外の研修や研究会に参加することを悩み事の解決方法として求めているにもかかわらず、参加していない、参加できない現状にあると考えられる。また朝永（2007）によれば、小学校教師のうち46.5%が「十分な研修が受けられない」と考えていることが報告されており、およそ半数の教師は、力量形成の場として学校外の研修や研究会への参加を望んでいるといえよう。

(2)群別分析結果

図4は、体育指導での悩み事の解決方法の望み

（「そうしたい」「とてもそうしたい」を合わせた割合）を群別に示したものである。

図4より、「同僚」、「文献」、「HP」の項目は、どの群の教師も有効な解決方法であると認知している傾向がみられる。加えて、体育主任を担うⅡ群の教師は「教委」や「附属」といった比較的公的な研修や研究会へ参加することを望んでいる傾向がみられる。また、体育を研究教科としているⅢ群の教師は、「他校」や「地区」、「指定校」や「大学」、「自主」や「民間」といった比較的自主的に行われている研究会や研修の機会への参加を望んでいる傾向がみられる。そして、Ⅳ群の教師は、全体的に他の群の教師よりも望みが低い傾向がみられるが、「教委」、「他校」、「地区」、「指定校」、「附属」の項目については比較的高い結果を示している。

このような結果から、体育指導に関する悩み事の解決方法として、「同僚」、「文献」、「HP」はもちろんのこと、体育指導に積極的に関与する立場にある教師は、積極的に学校外の研究会や研修へ参加することを望んでいた。また、そのような立場にない教師も学校外の研修機会を望んでいた。しかしながら、学校外へ研修に出かけることは現状として低い傾向にあった。これには2つの原因が考えられる。1つには、学校外の研修の場に参加することを望みながらも、他教科の指導や教科外の指導、さらには校務分掌や事務処理といった仕事にも力を注がなければいけないという小学校

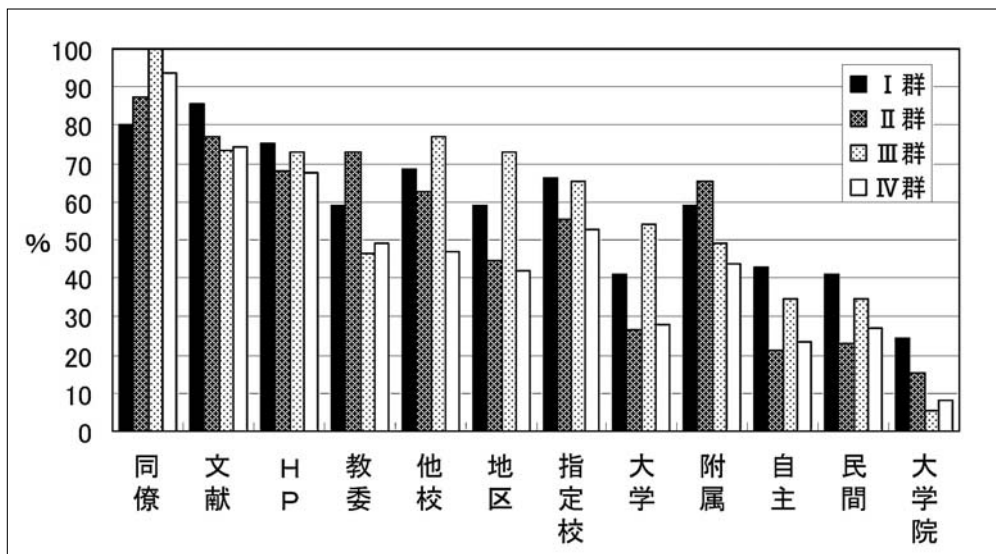


図4 群別にみた悩み事の解決方法に対する望み

教師の多忙によるものである。2つ目には、学校外の研修の場に出かけることを望みながらも、勤務時間内に研修の場に出かけるとなると、同僚の教師との調整や補充教員の確保、管理職や教育委員会の認可など様々な困難が待っている現実である。このため、学校外の研修の場に出かけることは、学校運営上の支障が出ないよう、土日や長期休業期間中に限られる。この困難を克服するためには、教師が学校外の場にも研修に出かけ、力量を形成することを奨励する学校の風土や財政的な支援が不可欠であろう。

以上のような現状をふまえると、学校内における同僚教師相互の学び合いを充実させることが、悩み事の有効な解決方法であると考えられる。具体的には、木原（2010）が示している「中堅教師が若手の成長を支援する『メンタリング』や、ある領域に秀でた教師が他の教師のその領域の成長を支援する『コーチング』、さらに同僚の教師同士がお互いに成長を支援しあう『コー・コーチング』』といった日常的な研修形態が重要であると考えられる。その際、体育科の場合には、体育主任や研究教科で体育を担当している教師といった、体育指導に積極的に関与する立場にある教師が、校内研修の中心的役割を果たすことが期待される。

IV まとめ

本研究は、小学校教師が体育授業を行っていく上での悩み事を低減するために、これまでどのような解決方法をとってきているか、また悩み事の解決に向けてどのような解決方法を求めているのかの実態を把握し、有効な支援のあり方を検討することを目的として、昨年度開設された各種講習会を受講した現職教員を対象に分析を行った。その結果は以下のようにまとめることができた。

1. 体育指導に関する悩み事を解決する方法としては、現状・望みともに「同僚」、「文献」、「HP」が高い結果を示していた。これにより、悩み事の解決に同僚教師が重要な役割を担っていることが考えられた。そして、体育指導に積極的に関与する立場にある教師は、そうでない教師に比べて学校外の研修や研究会に参加する機会に恵まれていた。それゆえ、様々な教師が体育授業に関する悩み事を解決するためには、体育指導に積極的に関

与する立場にある教師が中心となり、学校内において専門的知識を交流し共有していくような校内研修の組織化が有効な支援として考えられた。

2. 体育指導に積極的に関与する立場の違いでみると、体育を研究教科として担っている教師は、積極的に学校外に悩み事を解決する場を求めている。また、そうでない立場の教師も、学校外の場に悩み事の解決を求める意識は低くなかった。そこから、教師が学校外の研修や研究会にも参加しやすいような学校の風土づくりや、財政的な支援が必要であることが考えられた。

〈付 記〉

本研究の一部は、日本学術振興会科学研究費補助金（基盤B）（課題番号21300221，研究代表者・木原成一郎）の補助を受けて行われた。

〈文 献〉

加登本仁・松田泰定・木原成一郎・岩田昌太郎・徳永隆治・林俊雄・村井潤・嘉数健悟（2010）

「体育授業の悩み事に関する調査研究（その1）－教職経験に伴う悩み事の差異を中心として－」『学校教育実践学研究』16：85-93.

木原成一郎・林 楠（2010）「イングランドの現職教育に関する研究－リバプール・ジョン・モア大学のメンター資格認定に焦点化して－」『学校教育実践学研究』16：105-116.

木下光正（2008）「体育教師の成長過程（体育教師の成長とその支援体制－体育における教師教育の経営を考える－、シンポジウム，体育経営管理，専門分科会企画）」『日本体育学会大会予稿集』59：37-38.

文部科学省ホームページ「10年経験者研修」
<http://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/kenshu/1244830.htm> 2010年11月23日検索.

高橋健夫（1992）「体育授業研究の方法に関する論議」『スポーツ教育学研究』特別号，pp.19-31.

朝永昌孝（2007）「第2節教員の悩み」（Benesse教育研究開発センター『第4回学習指導基本調査報告書－小学校・中学校を対象に－』，pp.126-129.）